

chromosomes. Intl. Symp. Evol. Asi. Prim. (Aug. 1996, Inuyama). Abstracts p.33.

2) Hirai, H. and Kawamoto, Y. (1996) Chromosome microdissection for molecular cytogenetic and genetic studies in macaques. XVth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstract no.731.

3) Kawamoto, Y. (1996) Genetic differentiation of longtail macaques (*Macaca fascicularis*) in the Philippines. Intl. Symp. Evol. Asi. Prim. (Aug. 1996, Inuyama). Abstracts p.28.

4) Kawamoto, Y. (1996) Mitochondrial DNA variations within and between local populations of Japanese macaques. XVth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstract no.734.

5) Suzuki, H., Kawamoto, Y. and Takenaka, O. (1996) Phylogenetic relationships among the 19 species of genus *Macaca* based on restriction site variations in rDNA spacers. Intl. Symp. Evol. Asi. Prim. (Aug. 1996, Inuyama). Abstracts p.18.

6) Takenaka, O., Kawamoto, Y., Setyadji, Rina H., Bambang Suryobroto & Harihara, S. (1996) The Sulawesi macaques - molecular approach -. Intl. Symp. Evol. Asi. Prim. (Aug. 1996, Inuyama). Abstracts p.51.

7) Takenaka, O., Setyadji, Rina H., Bambang Suryobroto, Watanabe, T. Watanabe, K. Kawamoto, Y., Hamada, Y. and Gotoh, S. (1996) Origin and evolution of the Sulawesi macaques: Sequence of Mitochondrial DNA. XVth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstract no.486.

8) Shimada, M. & Shotake, T. (1996) Population genetics of grivet monkeys (*Cercopithecus aethiops aethiops*) within and between local populations in Ethiopia. XVth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstract no.790.

-和文-

1) 庄武孝義 (1996) エチオピア、セミエン山岳地帯のゲラダヒヒの遺伝的変異性と繁殖集団の大きさ. 第12回日本霊長類学会 (1996年6月、吹田). 霊長類研究 12(3):259.

2) 川本 芳、竹中 修、渡辺邦夫、浜田 穰、後藤 俊二、渡辺 毅、Bambang Suryobroto(1996) *M. tonkeana* と *M. hecki* の雑種地域に関する集団遺伝学的研究. 第12回日本霊長類学会 (1996年6月、吹田). 霊長類研究 12(3):257.

3) 川本 芳(1996) 集団遺伝学的特性. 東北ニホンザルフォーラム「野生ニホンザルとの共存を考える」、ニホンザルの現況研究会、「東北地方のニホンザルの現況、生態、保護管理」(1996年11月、盛岡). プログラム・発表要旨集, p.3.

4) 平井啓久、川本 芳 (1996) 染色体顕微切断法によるニホンザルYの彩色プローブの作製. 第12回日本霊長類学会大会 (1996年6月、吹田). 霊長類研究 12:261.

5) 嶋田 誠、庄武孝義 (1996) グリベット・モンキー (*Cercopithecus aethiops aethiops*) における集団遺伝学的研究. 第12回日本霊長類学会 (1996年6月、吹田). 霊長類研究, 12(3):258.

6) 嶋田 誠、庄武孝義 (1996) エチオピア中央部のグリベット・モンキー (*Cercopithecus aethiops aethiops*) 地域集団における集団遺伝学的研究. 日本ナイル・エチオピア学会第5回学術大会 (1996年4月、八王子、東京). プログラム & 要旨集, pp.18-19.

系統発生分野

茂原信生・相見満・高井正成・内田亮子¹⁾

研究概要

A) ニホンザルの時代的な形態変化

茂原信生・川本芳²⁾

古代遺跡から発掘されるニホンザルの骨格にもとづいて、ニホンザルの形態の時代的な変化の研究や現生の同地方のニホンザルとの比較研究をおこない、ニホンザルの成り立ちを追求している。現在は、東北地方で発見された更新世ニホンザルを中心に研究している。

B) 霊長類の咀嚼器官の変化に関する研究

茂原信生

霊長類の咀嚼器官の研究の一環として、口腔容量と咀嚼器官との関連性に関する研究をおこなっている。とくにその容量を規制するものの解明、ならびに著しい違いを示す霊長類の口腔形態の機能に関して研究をおこなっている。

C) 東アジアの真猿類の起源と成立に関する研究

茂原信生・高井正成・國松豊³⁾

中国・タイ・ミャンマーなどに産出する真猿類の化石を検討し、真猿類の起源とそのアジアにおける進化に関しての研究をおこなっている。1996年度は中国雲南省の禄豊博物館において、同地出土のホミノイド化石の観察・計測をおこない、今後の調査のための予備調査をおこなった。

D) インドネシアにおける第四紀霊長類の研究

相見満

インドネシアの現生及び化石霊長類の系統・進化・分類について、詳細な研究をおこなった。

E) 南アメリカにおける第三紀の化石霊長類の研究

茂原信生・高井正成

(1) ボリビア国のサジャ地域において後期漸新世(約2500万年前)の地層の発掘調査をおこない、最古の広鼻猿類化石*Branisella*の新標本を発見した。この標本の系統的記載をおこないながら、広鼻猿類の起源に関する問題について研究をおこなっている。

(2) コロンビア国のラベンタ地域において中期中新世(約1500万年前)の地層の発掘調査をおこない、現生の広鼻猿類に近縁なさまざまな化石霊長類の標本を発見した。これらの化石種と現生種との関連性をもとに、現在の広鼻猿類の形態的な多様性について系統分類学的研究をおこなっている。

F) 化石及び現生ヒト上科各種の形態変異に関する研究

内田亮子

(1) 中新世ヒト上科化石の形態変異に関する研究として、ケニア国立博物館で、Rusinga島

Kaswanga Primate Site出土の*Proconsul*資料から歯と顎形態のデータ収集をおこなった。Kaswanga資料内の形態変異を、他のRusinga島*Proconsul*資料および現生大型類人猿の変異パターンと比較し、*Proconsul*の種分類と系統関係の研究を続けている。

(2) 現生大型類人猿の頭蓋および歯形態の種内変異パターンの分析とともに、形態変異の要因とその進化過程を検討するため、遺伝的および生態的変異パターンとの比較を試みている。

G) 東アジア地域における歯科人類学的調査

茂原信生・高井正成

中央アジア地域の新石器時代人から現代人を対象にした人類学的調査を継続中である。タイ国サイヨック地域で新石器時代の洞穴遺跡の発掘をおこない、日本人の祖先に関するデータの集積をはかっている。また、歯科人類学的調査としてパキスタンやモンゴルの現代人を対象に歯科疾患と歯列の印象採得をおこない、モンゴロイド系諸民族の歯科形態の比較検討と民族の成立に関する研究をおこなっている。

H) 古代日本人および日本犬の研究

茂原信生

日本の古代人の研究、ならびに人と密接な関係を持つ古代犬の形質の解析によって、日本人の由来とその移動を追求している。人骨の研究は海岸部の縄文人と山間部の縄文時代人の違いに着目して研究を進めている。古代犬に関しては、国内および中国の研究者と古代中国犬に関する共同研究を進めている。

I) 科学の発達と生命観の変遷に関する学際的研究

内田亮子

生命、人間、自然そして進化概念の歴史的推移と文化的差異を検討する国際日本文化研究センター総合大学院大学共同研究「生命科学と生命観：20世紀における発展と変遷」に参加している。

1) 1997年2月15日付けで千葉大学文学部に転任

2) 集団遺伝分野 3) 形態進化分野

論文 /

—英文—

- 1) Shigehara, N., Onodera, S. & Etoh, M. (1997) Sex Determination by Discriminant Analysis and Evaluation of Non-metric Traits in the Dog Skeleton. In "Osteometry of Makah and Coast Salish Dogs" Susan J. Crockford, Archaeology Press, Simon Fraser University, Canada. pp.113-126.
- 2) Natori, M. & Shigehara, N. (1997) Loss of the third upper premolar in *Suncus murinus* and its relation to jaw size. *Acta Theriologica*. 42(1):99-104.
- 3) Aimi, M., & Bakar, A. (1996) Distribution and deployment of *Fresbytis melalophos* group in Sumatera, Indonesia. *Primates*. 37:399-409.
- 4) Nakatsukasa, M., Takai, M., & Setoguchi, T. (1997) Functional morphology of the postcranium and locomotion behavior of *Neosaimiri fieldsi*, a Saimiri-like Middle Miocene platyrrhine. *Am. J. Phys. Anthropol.* 102:515-544.
- 5) Uchida, A. (1996) Dental variation of *Proconsul* from the Tinderet region, Kenya. *J. Hum. Evol.* 31:489-497.
- 6) Uchida, A. (1996) Craniodental Variation Among the Great Apes. *Peabody Museum Bulletin 4*, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, Cambridge.

—和文—

- 1) 茂原信生 (1996) 霊長類の眼窩の方向性. *霊長類学研究* 12:65-78.
- 2) 内田亮子 (1997) 現生および中新世大型ヒト上科の変異と進化—研究の現状. *Anthropol. Sci.* 104(5):365-383.

報告・その他

—英文—

- 1) Aimi, M., & Bakar, A. (1996) Distribution and deployment of *Fresbytis melalophos*

group in Sumatra, Indonesia. *Ann. Rep. FBRT Project, No.2:48-61.*

—和文—

- 1) 茂原信生 (1996) 火葬墓人骨の分析。「舎人遺跡」足立区遺構遺跡調査会, pp.205-206.
- 2) 茂原信生・松島和己 (1996) 中村中平遺跡 (長野県飯田市) から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片. 飯田市美術博物館研究紀要 6:137-151.
- 3) 茂原信生・芹澤雅夫・桜井秀雄 (1997) 寺野東遺跡出土の人骨. 栃木県埋蔵文化財調査報告書第185集「寺野東遺跡VIII」, pp.247-249.
- 4) 茂原信生 (1997) 滝沢遺跡 (長野県御代田町) 出土の動物骨. 「塩野西遺跡群: 滝沢遺跡」, 御代田町教育委員会, pp.471-477.
- 5) 茂原信生 (1997) 滝沢遺跡 (長野県御代田町) 出土の人骨. 「塩野西遺跡群: 滝沢遺跡」, 御代田町教育委員会, pp.228-238.
- 6) 茂原信生 (1996) 坊荒句出土の江戸時代人骨ならびに馬骨. 春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書, pp.454-495.
- 7) 茂原信生・桜井秀雄 (1996) 五反島遺跡出土獣骨. 吹田市五反島遺跡発掘調査報告書 (自然科学編), pp.63-107.
- 8) 茂原信生 (1996) 信濃に稲作を伝えた人々. 信濃毎日新聞社, (新聞)
- 9) 茂原信生 (1996) 霊長類の進化—人類への6500万年. 豊橋市自然史博物館プレシンプジウム資料集. pp.33-40.
- 10) 杉山幸丸編, 杉山幸丸・相見満・斉藤千映美・室山泰之・松村秀一・浜井美弥 (1996) 「サル」の百科」, データハウス, 東京, pp.1-238.
- 11) 相見満 (1995) 学名の話(25) 真猿類の元祖? カトピテクス *Catopithecus browni* Simons, 1989. *モンキー* 264:12-15.
- 12) 相見満 (1996) 学名の話(26) フィアンセの名前をもらったコノハザル *Fresbytis aygula margae* Hooijer, 1948. *モンキー* 267:9-10.
- 13) 相見満 (1996) 学名の話(27) ビルトダウン人 *Eoanthropus dawsoni* Woodward, 1913. *モンキー* 268:10-14.

- 14) 相見満 (1996) 学名の話(28) ドメイン 古細菌 Domain Archaea. モンキー 270,271:9-12.
- 15) 高井正成 (1996) ヒトが座るといふこと. AXIS 66:52-55.
- 16) 内田亮子 (1996) 種内変異からみた大型類人猿の進化. 科学 66(6):419-427.
- 17) 木下實 (1996) ニホンザルの四季 —志賀高原の冬—. モンキー 267:24.

学会発表等

-英文-

- 1) Aimi, M.(1996) Deployment of *Presbytis* in Sumatera, Indonesia. Intl. Symp. Evol. Asi. Prim. (Aug. 1996, Inuyama) Abstracts p.44.

-和文-

- 1) 茂原信生 (1996) 霊長類の進化—ヒトへの6500万年. 豊橋市立自然史博物館「大進化」(講演)
- 2) 茂原信生 (1996) 日本人の起源—信濃に稲作を伝えた人々. 長野県農業大学校 (講演)
- 3) 岡田成賛・諏訪文彦・茂原信生・毛利俊雄 (1997) ニホンザル嗅覚器の微細血管構築. 第102回日本解剖学会総会 (名古屋)
- 4) 相見満 (1996) コノハザルのスマトラでの分布の特徴. 第12回日本霊長類学会大会 (1996年6月、大阪) 霊長類研究 12(3):272.
- 5) 高井正成・瀬戸口烈司 (1996) 広鼻猿類の起源と進化: 最近の諸分野の成果による系統分類の現状. 第12回日本霊長類学会大会 (1996年6月、大阪). 霊長類研究 12(3):270.
- 6) 高井正成 (1997) 形態から見た霊長類の進化. 第102回解剖学会分科会「第9回形態科学研究会」
- 7) 内田亮子 (1996) 顎と歯はどこまで食性を語るか? 第50回日本人類学会・民族学会連合大会、第24回キネシオロジー分科会大会 (第36回シンポジウム)
- 8) 内田亮子 (1997) ヒトの進化の最近の話題. 第102回解剖学会分科会「第9回形態科学研究会」

社会生態研究部門

生態機構分野

杉山幸丸・森 明雄・山極寿一・松村秀一

研究概要

A) 西および中央アフリカに生息する大型類人猿の行動・生態学

杉山幸丸・山極寿一・Kanyunyi A. Basabose^{*)}
Michael A. Huffman^{*)}・山越 言^{*)}
竹元博幸^{*)}・松原 幹^{*)}

全頭個体識別のもとに長期追跡してきたギニア国ボッソウの野生チンパンジーについては、野外実験も含めた道具使用行動の詳細な観察とVTR記録の分析・整理を進め、その発達と伝播の分析をおこなった。道具使用行動は、主要な果実が不足する季節によく採食される3種の「かなめの食物」のうち2種に用いられており、チンパンジーの生存が道具に大きく依存していることが示唆された。

以前より調査を継続しているザイール国カフジ・ピエガ国立公園では、ゴリラとチンパンジーの年間にわたる食性、利用域の変化を分析し、平行して継続観察している植物のフェノロジーに関する資料と比較して、両種類人猿が互いに異なる採食戦略を用いて採食競争を抑えていることを明らかにした。また、ウガンダ国のブウィンディ国立公園、ブドンゴ保護区、タンザニアのマハレ国立公園やゴンベ国立公園で両種類人猿の生態調査をおこない、類人猿が用いていると考えられる菓草の薬理効果や摂取様式を比較している。

B) ヒヒ類の研究

森 明雄

ヒヒ類の重層社会を行動学的に分析することを目標にして、エチオピア南部アルシ州のガラダヒヒのポピュレーションの調査を行っている。昨年度から引き続き8ヶ月の継続調査を行いユニット構成の季節変化を調べた。乾期の厳しくなる時期とそれに引き継ぐ小雨期の開始で、グループの遊動域が大きくなるとともに、その構成はかなり激しく変化することがわかった。これは、これまでセミエン国立公園でえられていた、安定したユニット構成とはかなり異なる。また、各ユニットのホームレンジ利用とユニット間の交渉に関わるデ